白い砂

山口県　真福寺　副住職　大野泰生

あるお檀家さんのお話です。その方は、終戦後大陸から帰還しました。激しい戦争で命が助かったこと、故郷に戻ってくることができたことに「目に見えない様々な力に守られました」と、深く感謝されていました。故郷に帰り最初にされたのは、命を守っていただいた故郷のお寺や神社、先祖のお墓へ、お礼のお参りをすることでした。

しかしこのときお檀家さんは、着の身着のままで帰ってきたこともあり、その冬を無事越せるかどうかもわからない状況だったそうです。お参りの帰り道、海岸沿いを歩いていると、波間に何か浮いているのが見えました。近寄ってみるとそれは1枚の毛布でした。その毛布を洗って乾かし暖を取ることができたおかげで、寒い冬を乗り切ることができました。その間に仕事も見つかり生計を立て直すこともできました。「このような奇跡は、これもまた神仏、ご先祖のご加護にちがいない」とより一層感謝の思いを篤くされたそうです。

お檀家さんは生活が落ち着いたころ、毎朝「散歩」をするようになりました。家の近所を散策し、最後に海岸に降りて白くさらさらとした砂を手にすくうと、ゆっくりこぼさないように近くの祠まで持っていき、境内に撒いて手を合わせていたのだそうです。

ある時、住職がお檀家さんに「境内を白い砂でいっぱいにしたいのなら、お寺にあるスコップと一輪車をお貸ししますよ」と声をかけました。しかし、お檀家さんは笑って「スコップや一輪車で運んだのでは、私の気持ちを伝えることにはなりませんから」とやんわり断られたそうです。

このとき住職は、お檀家さんが白い砂を自分自身の手で運ぶことで「お寺の為に、自分なりに出来ることをしたい」と感謝の気持ちを伝えていることに気づきました。しばらくしてその祠に行くと、境内には4、50センチもの白い砂が厚く敷き詰められていました。

私たちの毎日の営みを振り返りますと、お仏壇のある方であれば、花や水、お茶やご飯をお供えし、ろうそくに火をともし、線香を立て、手を合わせます。またお仏壇のないお家でも、お盆やお彼岸に実家を訪れ仏壇やお墓に手を合わせます。また、法事などの特別な時には、近親者で集まりご法事を営んだりされることでしょう。その一つ一つが、神仏や故人を偲んで感謝を表す行いです。

私たちはその思いを、お経を通してお伝えしていますが、きっとそこには、お檀家さんのお供えされた白い砂と同じように、みなさんの心が厚く敷き詰められているのだろうと感じています。届けられたみなさんの気持ちを受け取り、神仏やご先祖様はきっと喜ばれていることでしょう。